

動物遺存体の調査(3)

埋蔵文化財センター

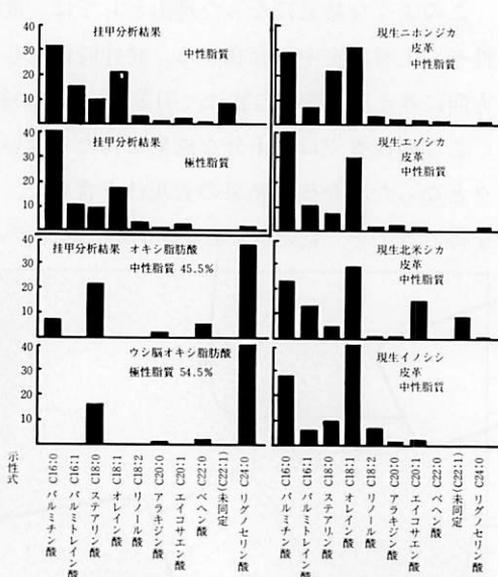
1 現生標本の作成 出土した動物遺存体の種名や部位を知るためには、確実な現生骨格標本と対比しながら同定作業を行わなければならない。当センターでは3年前よりこのような標本の作成につとめてきた。今年度までに作成した標本は、哺乳類73個体、鳥類56個体、魚類230個体、爬虫類・両生類16個体と貝類326種類など、総計700余個体を数えるにいたっている。

2 動物遺存体の調査 今年度は、大阪府八尾市恩智遺跡(縄文晩期)、長崎県伊木力遺跡(縄文前期から後期)、京都府向日市長岡京跡(8世紀後半)などの分析を行った。特に長岡京跡出土のウマの頭蓋は、前年の年報で報告した大阪府八尾市城山遺跡の例のように脳を取り出した痕跡が見られず、『養老麋牧令』の規定に合致しない例の存在が明白になった。

3 動物遺存体出土遺跡・文献データベースの作成 動物遺存体出土地名表、関係文献情報をデータベース化すべく、当研究所所蔵図書より台帳を作成した。作業はまず、全国遺跡台帳から、貝塚、洞穴などの遺跡を選び出し、遺跡ごとに報告書その他の文献から必要な内容を抜き書きした。縄文時代から中近世までの同種の遺跡総数は3,000件余り。うち、報告のあるものは1,400件余りであった。これは酒詰伸男による『日本縄文石器時代食料総説』、『日本貝塚地名表』の最新版にあたる。来年度より入力にかかり、様々な形で利用可能にしたい。

4 脂肪酸の分析 飛鳥寺塔心礎出土の挂甲小札に付着した皮革の脂肪酸分析を帯広畜産大学中野益男氏に依頼し、以下の結果を得た。

「ステロールは、コレステロール89%と動物性を示した。直鎖状の普通の脂肪酸はパルミチン酸44%と最も多く、次いでオレイン酸、ステアリン酸、パルミトレイン酸、リノール酸であった。この脂肪酸パターンは、現生ニホンジカ、エゾシカ、イノシン、ウシ、ウマ、ウサギなどの皮革及びそれらの膠質の中で、ニホンジカ皮革のそれと最も近い距離にあった。また、皮革に存在せず、脳・神経組織に特異的に存在するオキシ脂肪酸として、3-ハイドロキシリグノセリン酸45%が検出された。このオキシ脂肪酸から動物種を同定することは出来なかったが、これらの成果から、この挂甲に用いられた皮革は、脳糞法によってなめされたものと推定できる。(中野氏の鑑定を要約)」 (松井 章)



飛鳥寺出土挂甲に付着した皮革の残存脂肪酸分析結果
注：オキシ脂肪酸はふつうの脂肪酸の名称にハイドロキシを冠する。